

# 農業の基本である土づくりや土壤管理を 卒業後に活かす

—土壤医検定試験合格者の声（その2）—

石橋 颯真\*

## 1 土壤医検定を受けたきっかけ

私は、新潟県農業大学校に通っています。稲作コースを専攻していて日々様々な稲作に関する知識を得ています。専攻である稲作を学ぶに従い、特に水稻の生育が土壤と深く関わりがあることに興味を持ちました。例えば、水稻の一番の病害である「いもち病」では、施肥窒素量が過剰となることで発生確率が高くなります。これは、施肥を県の指針通りに散布することで回避できる問題ではなく、土壤ごとに持っている窒素量（地力）や施肥成分を保持する能力（CEC）、ケイ酸含有量等が異なることで発生が大きく変動します。そのため、土壤の現状（能力）を知ることが重要とされています。

このような土壤と作物の関係を知り、土壤への関心が高まっていく中、学校で推奨している土壤医検定の存在を知りました。現在知っていることに加えて、土壤の専門的な知識を学ぶによい機会であると思い、土壤医検定を受験することとしました。

## 2 土壤医検定試験の受験勉強法

土壤試験を受けるにあたり、「土壤医3級の教科書」や学校で行われた「土壤医受験対策研修会」に参加するなどをして勉強してい



きました。その中では、作物ごとに適している土壤環境が異なること、連作による土壤障害の発生理由、対策法などの知識を得ることができました。

例えば、土壤環境に影響を与えるpHとECについても深く学ぶことができました。pHは酸性、アルカリ性によって根が吸収しやすくなる成分が異なります。つまり作物が求める成分に適したpHに調整することが作物生産に有利であることを知りました。ECは土壤中の塩類濃度の目安で、塩類濃度が高いと根の水分吸収が妨げられ枯れてしまいます。

濃度が上昇する原因として降雨のない施設栽培での化学肥料等の副成分が留まることがあると知りました。学校では稲作を専攻していたので、稲作以外の管理については詳しくありませんでした。

また、学校で過去の出題傾向から、まとめられたものを傾向と対策として勉強しまし

\*新潟県農業大学校 稲作経営科2学年

た。必須元素、有用元素、pH、電気伝導度、EC、塩基類、塩基飽和度、連作障害、土壌改良、施肥、灌水等について重点的に勉強し、特に、過去問を2～3回取り組むことが非常に有効だと思われました。

私は、これらの勉強に取り組むことで3級に合格することができました。今後はさらに知識を深めていき2級にも挑戦し、より専門的な知識の習得をしていきたいと考えています。

### 3 今後に向けて

現在、新潟県の稲作農家は所得低下に伴う農業従事者の減少といった課題があります。私は今後の進路として、JAに就職し営農指導を通して農家の方と共にこれらの課題に取り組んでいきたいと考えています。

農業の基本は土づくりや土壌管理であり、将来の自分の仕事に役に立つ重要な知識であると思っています。今回、土壌医試験を受けることで土壌の基礎知識を得ることができ、非常によかったと考えています。

